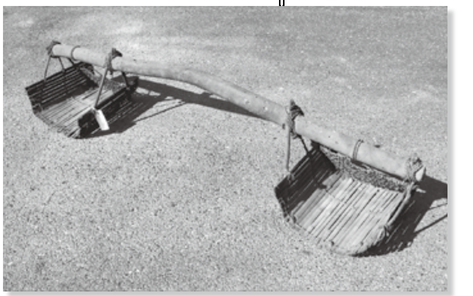
市史の小径 34

よくぞ生き残った中世の農具

甲南ふれあいの館には、棒の両端に、竹製のかごを取り付けた道具がいくつも収蔵されています。ノンゴ・ノウゴなどと呼ばれ、かつて甲南・甲賀・水口の丘陵地帯で、土運びに使われました。この一帯は「特殊重粘土地帯」とも呼ばれ、日照りがくれば深刻な干害、水があれば腰までもぐる湿田と、耕作に苦労の多いところでした。

これらの田は、年間を通じて水を張る必要があり、農閑期にズリンなどと呼ばれる粘土に刈草など入れた肥効のある堆土（クマシ）を、田に入れました。ノンゴはこの堆土を運ぶ土持ちに用いられたのですが、現在では日本中を探してもおそらく他では残っていないといわれています。

ところが、このノンゴと全く同じ形で同じような用途に使われている様子が、500年前の絵巻物に描かれています。なぜそれが甲賀の丘陵地帯で使い続けられたのか。その謎は今秋刊行予定の市史第6巻で明らかにされます。



▲ノンゴ（ノウゴ）：甲南ふれあいの館蔵

【市史販売所】
〈水口〉TSUTAYAさんぽうどう・ハタヤ書店・山川書店・山田書店・水口歴史民俗資料館〈土山〉ウエノ・新名神土山サービスエリア案内所・土山歴史民俗資料館〈甲賀〉かふか生涯学習館〈甲南〉WING甲南店・甲南庁舎市史編さん室〈信楽〉大宝堂谷川書店・信楽中央公民館

問い合わせ　歴史文化財課　市史編さん室
甲南庁舎3階　☎86-8075　FAX 86-8216

みんなの窓

「泣いた赤鬼」（浜田廣介（はまだひろすけ）作）から考える

山の中に、一人の赤鬼が住んでいました。赤鬼は、村人たちとも仲よくしたいと考えて、自分の家の前に、

「心のやさしい鬼の家です。どなたでもおいでください。おいしいお菓子がございます。お茶も沸かしてございます。」

と書いた立て札を立てました。

けれども、村人たちは疑って誰も遊びに来ません。赤鬼は悲しみ、信用してもらえないことをくやしがり、ついには腹を立てて、立て札を引き抜いてしまいました。

そこへ、友だちの青鬼が訪ねて来ました。わけを聞いた青鬼は、次のように言いました。

「ぼくが村へ出かけて大暴れをする。そこへ赤鬼くんが出てきて、ぼくをこらしめれば、村人たちにも、赤鬼くんが心のやさしい鬼だということがわかるだろう。」

「それでは君にすまない」としぶる赤鬼を青鬼は無理やり引っ張って村へ出かけました。

計画は成功して、村人たちは安心して赤鬼のところへ遊びにくるようになりました。

こうして、赤鬼には村人の友だちができ、赤鬼はとても喜びました。

しかし、日がたつにつれて、気になってくることがありました。それは、あの日から訪ねて来なくなった青鬼のことです。

ある日、赤鬼は、青鬼の家を訪ねました。青鬼の家は、戸が堅く閉まっていました。ふと、気がつくと、戸のわきに貼り紙がしてあり、そこには次のように書かれていました。

「赤鬼くん、村人たちと仲よく楽しく暮らしてください。このままぼくが君とつき合っていると、村人たちは君も悪い鬼だと疑うかもしれません。そう考えて、ぼくは旅に出ることにしました。けれども、ぼくは君を忘れません。体を大事にしてください。どこまでも君の友だち、青鬼。」

赤鬼は、だまってそれを読みました。二度も三度も読みました。戸に手をかけて顔を押し付け、しくしくと涙を流しました。

このお話から次のように考えましたが、みなさんはいかがですか。

○鬼が村人に分かってもらうために努力することも大切だけれど、それ以上に、村人が鬼のことを分かろうと努力すべきだったのではないでしょうか。

○容姿や文化の違いを認め合うことが大切であり、それを理由にいじめや排除をすることが間違っているのではないでしょうか。

問い合わせ　人権推進課　☎65-0693　FAX 63-4582